



くば小児科 クリニック

院内報 2009年12月・2010年1月号

● 院内版感染症情報 ～2010年第02週 (01/11～01/17)

2009-2010年	第38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	01	02週
インフルエンザ	2	0	2	3	8	22	32	25	15	32	46	22	15	14	5	4	1
咽頭結膜熱	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
A群溶連菌咽頭炎	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
感染性胃腸炎	2	1	2	1	2	2	3	1	1	5	0	5	2	5	4	7	8
水痘	0	1	1	0	0	3	0	2	0	0	1	1	0	2	1	2	1
手足口病	5	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
伝染性紅斑	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0
突発性発疹	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0
百日咳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
風疹	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ヘルパンギーナ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
麻疹	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
流行性耳下腺炎	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2	0

インフルエンザは11月中旬にいったん減少し、11月最終週をピークに急上昇した後、減少傾向が続き、冬休みに入ってほぼ下火になりました。7月から12月中旬までに全国で1400万人以上が感染し、その8割の1100万人は未成年だという推計も発表されましたが、未成年の人口は2300万人程度ですので、疑い例や不顕性感染を含めると、すでに子どもの過半数は感染したものと推測されます。乳幼児や大人を含めて、未感染の人もある程度残っているので、3学期に入って小さな山がみられるかもしれません。12月末現在ウイルス定点で検出されているインフルエンザウイルスはほぼ全てA/H1N1（いわゆる新型）ですが、今後A香港型などの季節性が流行してくるかどうか注意が必要です。

ほかの感染症は目立ちませんが、インフルエンザが下火になると入れ替わりに、この時期に毎年見られるウイルス性胃腸炎（ノロまたはロタウイルス）や咳がひどくなるタイプ（RSウイルスなど）が増えてきています。

一部の保育園などで水ぼうそうやおたふくかぜが流行しているようですが、水ぼうそうやおたふくかぜのワクチンは個人防衛ためのもので、流行は野放し状態にあると言えます。（米国では両ワクチンとも公費で接種されています）

● インフルエンザワクチンの接種状況

基礎疾患のない健康な成人に加えて、これまで接種できなかった0歳の乳児（当院では6ヶ月以上）にも接種できるようになり、全ての年齢で接種できることになっています。また、既に感染した子どもも多く、流行も下火になっていることから、予約された方にはできるだけ早いうちに接種を終わらせてしまいたい状況にあります。今後はワクチンの入荷も予約分のみにと絞っていきますので、0歳児や健康な成人も含めて、ご希望の方は早めにお申込みください。季節性ワクチンの接種は終了しております。

◎ 当院では輸入インフルエンザワクチンは使用しません

中高生までは国産ワクチンを接種することになっていますが、大人でも入手できる限り国産ワクチンで接種します。輸入ワクチンは国産と違って免疫を高める成分が入っていて筋肉内注射が必要なことや、使いにくい大瓶であること、国内での使用経験がなく副反応などの懸念も解消されていないことから、当院では使用しないことにしました。国産ワクチンの供給も余裕がある状況なので、輸入ワクチンはほぼ全量余ることになるでしょう（これも税金）。

● 子宮頸がん予防のHPVワクチン 1月から接種開始

- ◇ 接種対象：10歳以上の女性（11～14歳に推奨）
- ◇ 接種方法：1回0.5mlを3回、筋注（初回、1ヶ月後、初回の6ヶ月後）
- ◇ 接種料金：任意接種（全額自己負担）、1回 14,000円

前号でお知らせした子宮頸がん予防のヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチンを1月から接種開始します。非常に高額なワクチンですが、予防効果は高く接種率の向上による子宮頸がんの減少が期待されており、定期接種化（無料化）が望めます。民主党の総選挙「政策集」の中には掲載されており、政府でも公費負担を検討しているようですが、その時期や金額（一部か全額か）、対象年齢などはまだわかりません。当院ではなるべく多くの方が接種できるよ

うに、最低レベルの価格に抑えてありますが、お子さんの将来の健康のために中学生になったらHPVワクチンのプレゼントをお勧めします。

○ HPVワクチンの効果は？ 子宮頸がん検診とどちらが大事？

子宮頸がん予防率		HPVワクチン接種率		
		85%	50%	10%
検診受診率	85%	95%	91%	86%
	50%	82%	69%	54%
	10%	67%	44%	17%
	0%	64%	38%	8%

これは結論から言うと、どちらが大事ということではなく「10代で予防接種、20代から検診」と両方受けていくことが大切です。

HPVワクチンは16型と18型というがんを起ししやすい2つの型に対するものですが、悪性化しやすい型は100種類のHPVのうち15種類が知られており、この2つの型だけで100%予防できるわけではありません。また、検診ではがん化する前の異形成の段階から発見でき、ごく初期に発見すれば子宮を温存して負担の少ない手術でほぼ全例完治することができます。HPVワクチン+検診のセットを全員が受ければ、子宮頸がんを激減させることができるのです。

なお、子宮頸がんは喫煙でも2倍以上リスクが高くなり、喫煙+HPVで相乗的に高まることがわかっています。依然として若い女性の喫煙率が高く、20～30代の子宮頸がんが急増していることの大きな要因になっているのです。

● 1～2月の診療日、急病診療所、各種教室、相談の予定

1月4日から通常診療で、2月の臨時休診はありません。急病診療所当番は2月6日(土)夜、2月28日(日)夜。次回の赤ちゃん教室は、3月20日(土)の予定です。育児・子どもの心相談、禁煙外来(保険診療)は随時受け付けております。メール予約システムをご利用下さい。

発行 2010年1月21日 通巻第143号
 〒031-0823 八戸市湊高台1丁目12-26
 TEL 0178-32-1198 FAX 0178-32-1197
<http://www.kuba.gr.jp/>
 ☆ 当院は「敷地内禁煙」です ☆